

随想

回想：南極観測と私 “宗谷”の時代を中心に

吉田 栄夫

発端

日本が1957/58年の国際地球観測年の世界規模での観測で、その中核をなす南極地域の国際協同観測計画に、わが国が国家事業として参加することを決めたのは、1955年11月のことであった。当時私は東京大学理学部地理学教室で、修士課程の2年生として、修士論文に取り組んでいた。卒論の時から火山関連の事象に関心があった。しかし、この前年式正英先輩のお供として赤石山地北部の地形調査に加えていただき、そのご指導で氷河地形にも興味を抱くようになった。そしてわが国の南極観測が始まろうとする時、南極観測計画に関わっておられた私の恩師のおひとり吉川虎雄助教授が、「南極に行ってみる気はありませんか」と声を掛けて下さった。私は即座に是非とお願いした。これが今にいたるまで続く南極への微力の傾注への始まりであった。未知の南極の姿を少しでも知りたいたと、様々な文献を漁った。改築前の古い東京地学協会の書庫で、米国の古雑誌に載った貴重な論文を探し出したりした。1956年2月、朝日新聞社が主催した北海道瀟湖での、最初の訓練にも吉川虎雄、戸谷洋（当時、東京都立大学助手、私の旧制都立高校での地学の先生でもあった）両先生の驥尾に付して、参加させて頂いた。こうして南極への第一歩を踏み出した。

“宗谷”に乗船して

吉川先生は第1次観測に戸谷先生とともに参加され、設営支援や短い期間の中での地形学的調査で活躍された。隊長を務められた永田武（当時東大教授）先生の信頼厚く、第6次観測隊長を務められたほか、南極地名委員会委員長として尽力されるなど南極観測に貢献され、南極に寄せる想いは深かったという。私はその余沢のお蔭を蒙ってなんとかやってきたと痛感する。

私は本観測とされた第2次南極観測に参加できることになった。担当は「地理（犬）」（公式記録から）であった。第1次観測隊が南極で苦闘している間、私は北海道稚内で犬橇訓練を受けていた。第2次観測で私は地理部門と犬橇運用をひとりで担当することになったのである。参加時博士課程2年の院生、26才の身で不安もあったが、初めて訪れる南極への期待と、全力を尽くしたいという漠然とした気持ちでいっぱいであった。

初めて見る氷山、海面を覆う大小の流氷氷盤に感激していたのも束の間、悪天と手強い海水で耐水観測船「宗谷」は動けなくなり、いわゆるピセット状態に陥り、周りの氷盤とともに40日間西へと流された。私はこの間、あまり動かない氷山を利用して船の位置を測定して流され方を調べ、海水の溶存酸素分析や海底の採泥を手伝うなどして日を過ごした。11名の昭和基地にいる第1次越冬隊との交代も次第に危惧されるようになり、当初の20名越冬計画から越冬人数を減らす計画の変更が、隊幹部により検討される中、「自分の学問分野が他分野より重要なので、優先的に越冬を認めるべきだ」といった意見もチラホラ聞こえてきた。これについて永田隊長は私に、誰でも自分の分野が重要だと考えて学問をやっている。すべて平等なのだと洩らされた。私が地理部門という弱小分野？を背負っていることに配慮してのことかも知れない。7名までに減らされた越冬予定者も、結局天候は回復せず、「宗谷」の真水保有量がなくなる限度がきて、やむなく15頭のカラフト犬を残し（母犬と子犬は収容）、越冬を断念した。

越冬できず大変残念であったが、圧倒的な自然の力、その変化をつぶさに体験し、船内の人間模様を眺めて時にはそれに巻き込まれ、そして全員集合での永田隊長の越冬観測断念の声涙下る談話を聴いたことなどなど、私は貴重な経験を得たのである。

第4次越冬にて

私は1959/61年に第4次越冬隊に参加、今度の担当は「地学・犬」、新たに11頭のカラフト犬を搬入し、

第3次隊で発見された、無人の昭和基地で生き延びたタロ・ジロを加えて犬橿を運用しようとの目論みであった。第3次越冬隊には雪氷学や地質学の専門家は含まれていなかった。雪氷学、地質学、自然地理学分野の3名が一括地学担当となり、4次越冬隊は地学の野外調査に重点を置いた編成となった。

しかし、それまで未発見であった新山地を目指し、最後の長期野外調査の準備がほぼ整った1960年10月10日、私の仕事を手伝ってくれようとして私とともに戸外に出た福島紳隊員と私は、猛烈なブリザード（雪嵐）の中で離れ離れとなり、私だけが基地建物に辿り着くという結果となった。必死の捜索にも拘らず行方は判らなかつた。10月17日をもって死亡認定とするという南極本部からの電報が来た。

悲しみをこらえて11月1日、新たな山地（後に「やまと山脈」と命名）に向け内陸調査に出発、私はナビゲーターを務めた。山地では南北およそ50kmに亘り七つの山塊からなる山地の、各山塊を繋ぎ概略の地形図を描くための三角測量と、地球上でこれを位置付ける天測（天文測量）を、経緯儀を用いて行いつつ、地形の観察に努めた。テントの中で、次第に出来上がる粗末な略図と地形調査の結果をまとめるのは、野外での辛さを忘れる喜びでもあった。12月15日昭和基地に戻ると、次の5次隊が到着する前にと、急いで福島隊員を記念するケルンを基地の一角に皆で積んだ。“やまと山脈”から持ち帰った石を用い、中に彼が愛用していたパイプを入れた。そして“手空き総員”で基地のある東オングル島を越え、隣の西オングル島の端まで最後の捜索をし、彼と基地に別れを告げた。（1968年2月、8次越冬を終えてまさに帰国の途に就こうとした時、9次越冬隊により、福島さんの遺体が西オングル島で発見された。この時南極に8次隊に5名、9次に2名の4次越冬の仲間がいた。4次越冬隊の福島さん

を除く全員14名の半数がいたのである。そして私が茶毘に付された福島さんのご遺骨を背負い帰国した。理外の理を感じる。）

その後のこと

第6次夏で昭和基地は一旦閉鎖、この間4次の越冬隊長であった鳥居鉄也博士が米国極地局の支援で、ロス海西岸の大きな露岩地域にあるドライバレーと呼ばれる地域の湖の地球化学的調査をすることになり、3名の地球化学者にお供して、1963年12月自然地理学的観点をに入れることになった。この時お茶の水女子大に奉職して、諸先生に温かく見守って頂いた。昭和基地周辺では見ることのできない多様な地学現象の調査で、目は大きく広がり、現地で外国の南極研究者との交流も生まれた。

1964年には広島大学に移り、1966/68年の第8次越冬、1974/75年の第16次夏隊、4回のドライバレー調査など、スタッフのご好意に甘えて、南極に関わった。そして1976年勝手をさせて頂いて、創立満3年の国立極地研究所へ移った。地学全体の責任者をさせて頂いたのは、当時の永田武所長のご意向であり、それは前述の故吉川虎雄先生の余沢の賜物でもあった。ここでは自らの研究成果は乏しく、専ら観測計画の立案と現地調査の責任者としてのサポート、成果の取まとめに止まった。しかし、在職中の足掛け18年に及ぶ南極条約関連のお手伝いを含めて、更に今に及ぶ日本極地研究振興会での研究者助成といった支援事業遂行を含め、いくばくかはお役に立ったのかなと想うこの頃である。

よしだ・よしお
元講師